

令和5年(2023年)度 学長賞

	表彰区分	所属	職名	氏名
1	教育活動、大学運営	教育・学生支援機構	准教授	竹中 喜一
			講師	上月 翔太
		教育学生支援部教育企画課	副課長	石川 尚
2	教育活動、大学運営	理工学研究科	教授	松浦 真也
			〃	山内 貴光
			〃	尾國 新一
			〃	樋上 喜信
			〃	二宮 崇
			准教授	甲斐 博
3	研究活動	医学系研究科	教授	日浅 陽一
4	研究活動	法文学部	教授	山本 與志隆
5	研究活動	理工学研究科(理)	教授	内藤 俊雄
6	研究活動	医学系研究科	教授	金川 基
7	スポーツ・芸術活動、地域連携活動	教育学部	教授	田中 雅人
8	地域連携活動	農学研究科附属 ハダカムギ開発研究センター	センター長(兼)、教授(兼)	荒木 卓哉
			副センター長(兼)、教授(兼)	八丈野 孝
			准教授(兼)	阿野 嘉孝
			〃	安部 真人
			助教(兼)	畠山 友翔
9	医療活動	医学部附属病院	救急部、感染制御部、看護部	
		医学部	医事課、医療サービス課	
10	医療活動	附属高等学校	養護教諭	寶田 千年
11	医療活動	医学部医事課	部員	松木 美保
12	大学運営	教育学生支援部教育支援課	チームリーダー	城戸 祐二
13	大学運営	総合健康センター	看護師	宮内 浩美
			看護師	大岩 美景
14	大学運営	研究支援部情報システム課	課長	森田 誠
15	大学運営	財務部財務企画課	副課長	宮内 裕介
16	大学運営	財務部財務企画課	チームリーダー	光井 雅恵
17	大学運営	施設基盤部安全環境課	部員	肥塚 由子

\*表彰区分順

令和5年度 学長賞

表彰区分	教育活動、大学運営
所属／職名／氏名	教育・学生支援機構／講師／上月 翔太 教育学生支援部教育企画課／副課長／石川 尚 近畿大学 I R ・教育支援センター／准教授／竹中 喜一 (～R5.3.31 愛媛大学教育・学生支援機構 准教授)

【愛媛大学における教育改革の推進】

主な取組み

1. 卒業生・修了生への追跡調査の企画実施

大学教育の効果を検証し、教育改善に活かすべく、学士課程、修士課程、博士課程の卒業・修了後3年を経た者に対する追跡調査を企画した。これにより令和4年から毎年追跡調査を実施し、その結果を教育改善に活用するための体制を整備した。

2. アセスメントプランの制定

学生の学習成果の向上を図るため、学習成果の評価の方針であるアセスメントプランについて、全学版を制定した他、各学部・各研究科・各学環のアセスメントプランの制定と公開に向けて教育コーディネーター研修会や教育学生支援会議を通じて支援を行った。

3. 「愛大トランスファラブルスキル」の制定

大学院生が社会で活躍するために必要となる汎用的能力として5つの「愛大トランスファラブルスキル」を制定した。さらに各研究科・各学環における教育活動と「愛大トランスファラブルスキル」の対応を整理するなど、育成に向けた体制を整備した。

4. 未来思考支援科目の開講

「変化の時代を生き抜き、世界的課題を理解して地域や国内外に生じる未来に向けた課題解決に貢献できる人材となるための基礎的知識と思考力を身に付けるための科目」である未来思考支援科目を共通教育において開講するための準備を中心的に担った。一部科目は令和5年度入学生から必修科目として提供される。

この他、愛大生の学習成果の公開の企画、博士課程学生を対象とした教育能力を高める授業科目の開講に向けた準備など、愛媛大学第4期中期計画にかかわる取組みにおいても確実な達成に向けた貢献を行い、「自立・協働し未来を切り拓く人材の輩出」の実現に寄与している。

以上の取組みによって、令和5年度「成果を中心とする実績状況に基づく配分」における「大学教育改革に向けた取組の実施状況（令和4年度実績）」において、28大学中、前年度26位から1位に順位を上げることとなった。

令和5年度 学長賞

表彰区分	教育活動、大学運営
所属／職名／氏名	大学院理工学研究科 教授／松浦 真也、教授／山内 貴光、教授／尾國 新一、 教授／樋上 喜信、教授／二宮 崇、准教授／甲斐 博

近年デジタル等の成長分野の人材不足が深刻化しており、それらの分野の人材育成は、我が国の国家的緊急課題となっている。また、愛媛県もデジタル人材育成を推進しており、本学に対して、多数の大学院修了生の輩出を含む、デジタル人材育成が求められている。このような「高度情報専門人材育成」という緊急課題へ迅速に対応するため、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（NIAD）に、大学・高専機能強化支援事業の基金が設置され、この基金への申請を行った。また、本学のデジタル情報人材育成戦略の一環として、大学院理工学研究科博士前期課程数理情報プログラムの募集人数を20人増員し、さらに、工学部にデジタル情報人材育成特別プログラムを設置し、受入目安人数として新たに30人増員するような工学部組織改編を行った（下図参照）。

大学院理工学研究科博士前期課程数理情報プログラムは、数学の諸分野の高度な理論から応用数学・数理情報・コンピュータ科学に至るまで、バランスの取れたカリキュラムを整え、科学的探究心を持つ意欲ある学生を教育し、主体的に研究・開発活動を実施できるレベルの課題探究能力及び問題解決能力を涵養している。

工学部デジタル情報人材育成特別プログラムは、コンピュータ科学や情報工学に興味のある学生の入学を想定し、既存のコンピュータ科学コースまたは応用情報工学コースへの配属を1年次から行う。また、実務家教員が担任教員となり、本プログラムの学生の履修指導や学生生活指導を行う。カリキュラムにおいては、企業などから提供される実課題に基づいたPBL演習を行うことや、大学院博士前期課程の科目を早期履修できることなどに特徴がある。

表彰者らは、上記のような、大学・高専機能強化支援事業への申請に関する業務、数理情報プログラム受入人数増員のための対応、およびデジタル情報人材育成特別プログラムに関する入試制度設計や組織再編などの業務を献身的に行い、多大な貢献をした。

【従来】			【デジタル情報人材育成特別プログラム設置後】		
学科	コース	入学定員 (人)	学科	コース	入学定員 (人)
工学科	機械工学コース	500	工学科	機械工学コース	530
	知能システム学コース			知能システム学コース	
	コンピュータ科学コース			材料デザイン工学コース	
	応用情報工学コース			化学・生命科学コース	
	材料デザイン工学コース			社会基盤工学コース	
	化学・生命科学コース			社会デザインコース	
	社会基盤工学コース			コンピュータ科学コース	
	社会デザインコース			応用情報工学コース	
	デジタル情報人材育成特別プログラム				

令和5年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／職名／氏名	医学系研究科 消化器・内分泌・代謝内科学／教授／日浅 陽一

この度は学長賞の栄誉を授かり、大変光栄に存じます。

私は、地元の愛媛県立今治西高校を卒業後、平成2年に愛媛大学医学部医学科を卒業し、消化器内科、特に肝臓内科を専門とする第三内科に入局し、医師としての研修を経て、平成7年に愛媛大学大学院に入学しました。当時、第三内科教授でいらっしゃいました恩地森一先生より、C型肝炎ウイルスの持続感染における樹状細胞の役割についての研究テーマをいただき、C型肝炎ウイルス感染による樹状細胞の直接的な機能低下作用を明らかにし、医学博士を授与いただきました。

大学院在学中に国内留学をさせていただいた東京都臨床医学総合研究所(現:東京都医学総合研究所)の小原道法先生に分子細胞生物学の基礎を学び、そのご縁で米国マサチューセッツ総合病院のRaymond T. Chung博士の研究室に留学することとなり、そこでC型肝炎ウイルスの複製を抑制しているはずのprotein kinase Rが、肝細胞癌で実は高発現しており、むしろ肝細胞癌の増殖を助長している事実を見つけることができました。

その後、C型肝炎ウイルス及びB型肝炎ウイルスの持続感染の機序、そしてこれらの感染により高率に発症する肝細胞癌の発癌および癌進展メカニズムとその制御による発癌抑制が私の研究のライフワークになっています。

第三内科診療科長および消化器・内分泌・代謝内科学教授に平成25年に就任してからも、このライフワークを継続しており、大学院時代から樹状細胞つながりで共同研究しているFazle Akbar氏の協力を得て、B型肝炎ウイルスの持続感染阻止と同ウイルスによる発癌抑制のために、ウイルス特異的なCTLの誘導が可能な、B型肝炎治療ワクチン開発の研究をしており、平成30年からAMED肝炎等克服実用化研究事業の支援をいただき、その臨床応用を目指しています。医師主導型臨床試験は多くの手間と、長期に亘る継続的な研究を必要としますが、幸い良いスタッフに恵まれ、確実に一步一步、その実現に向けて研究を進めているところです。

また、留学先で遭遇したprotein kinase Rについても当科のactiveな研究スタッフとともに研究を継続しており、分子病態医学の今村健志教授と共同研究して進めています。in vitroのみならずin vivoでもprotein kinase Rによる肝癌増殖効果を確認したほか、他の癌種にも広げて研究しており、本来生体防御に働いているはずの細胞内にユビキタスに存在するこの蛋白が、ある病的局面で生命を脅かす存在になることに、神秘と畏れを感じているところです。今後、その機序を解明するとともに、その研究結果に基づく抗腫瘍薬の開発に結びつけたいと考えています。

当科は、上記領域以外にも、消化管癌、炎症性腸疾患、膵癌、糖代謝と発癌、消化管と肝臓の腸肝相関、膵臓と肝臓の膵肝相関、そして消化器内視鏡、腹部超音波のデバイス開発や臨床研究と幅広く興味を持ち、研究を進めています。今回の学長賞につながる研究成果を得ましたのも、各領域で懸命に、そして真摯に研究に取り組んでいる当科スタッフの努力のおかげと存じております。この場を借りてスタッフに御礼を申し上げますとともに、各界の皆様には引き続きご支援を賜りたく、何卒よろしくごお願い申し上げます。

令和5年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／職名／氏名	法文学部／教授／山本 與志隆

私は学部、大学院時代以来、現代ドイツの哲学者 M. ハイデガーの思惟の研究に携わってきました。近年発表した「学術論文」は以下の1～6になります。特に論文1のもととなった2022年度の口頭発表は、ハイデガーの思惟の中でも、所謂『黒表紙のノート』の公刊によって人口に膾炙するようになった「超政治」のあり方を、ロマン主義という観点から捉え直そうとするもので、従来取り上げられなかった視点からの考察が評価され、その年度の最も優秀な発表に贈られる「ハイデガー・フォーラム渡邊二郎賞」を受賞しました。(右図、トロフィー)

1. ハイデガーはロマン主義者か？

『Heidegger-Forum』Vol. 17 (2023年)。(下図)

2. 自然と技術の解釈学—ハイデガーの『形而上学入門』を手掛かりとして—

『愛媛大学法文学部論集人文学編』第55号(2023年)。

3. ハイデガーの思惟における自然の布置について

『愛媛大学法文学部論集人文学編』第52号(2022年)。

4. ハイデガーの技術批判へのF. G. ユンガーの関わりについて

『愛媛大学法文学部論集人文学編』第50号(2021年)。

5. 諸学問の危機と現象学—フッサールとハイデガーの思惟を手引きとして—

『愛媛大学法文学部論集人文学編』第48号(2020年)。

6. ハイデガーの技術論における人間存在—E. ユンガーの思想との交錯

『倫理学研究』第49号(2019年)。



その他にもハイデガーの思惟の内実を多角的、多面的に解説、考察した『ハイデガー事典』(ハイデガー・フォーラム編、昭和堂、2021年)の編集委員会に参加し、編集と共に執筆も担当しています。

また、M. ハイデガー「エルンスト・ユンガーへ」(ハイデガー全集第90巻所収)の翻訳・解題を『総特集 ハイデガー：黒ノート・存在と時間・技術への問い』(『現代思想』46(3)、2018年)に発表しました。『ハイデガー全集第90巻エルンスト・ユンガーへ』全体の翻訳についても現在準備中です。

令和5年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／職名／氏名	理工学研究科／教授／内藤 俊雄

令和5年度の学長賞（研究活動）に選ばれた本研究は、内藤教授が愛媛大学に着任した平成23年4月から開始し、その後10年以上かけて着実に進めてきたテーマです。前住地の札幌から着任した当初（平成23年4月1日）は東北大震災（平成23年3月11日）の混乱の真ただ中で、実験装置も学生もいない空っぽの状態です。一つ一つ研究設備を導入しながら、ゼロからデザインした、まさに「愛媛大学から世界に向けて発信する」研究成果を目指した課題でした。今回、その地道で継続的な努力が実を結び、「研究活動における顕著な功績」という授与理由で上記の賞が与えられました。

その概要は、次のような研究です。物質の性質の中でも特に重要なのが、電気的性質、磁氣的性質および光学的性質です。これらの性質が自動運転や顔認識AIなどのハイ・テクノロジーを支えているからです。つまり、最先端技術は優れた材料と光を操る技術の掛け合わせでできています。このテーマの土台に当たる、電気・磁氣的性質の光に対する応答を様々な角度から調べる研究が、内藤教授のテーマです。これを既存の物質ではなく、独自に開発した“未来の主役”を狙う新物質を対象に研究してきました。例えば有機物と無機物の両方の特徴を持つ、金属錯体などです。新しい物質には、既存の物質にはない特性や機能が隠れている可能性があるからです。電気・磁氣的性質を念頭に置き、有機物と無機物の長所を掛け合わせた新物質です。さらに内藤教授の研究では光の使い方が独特です。通常、光を研究手段として使う場合、光を研究対象とする物質に当てて、その物質の分析を行うか、光照射によって性質を変えてしまうかのどちらかです。しかし内藤教授は光を当てた後の物質がどのような過程を経て元の状態に戻っていく、あるいは別の状態に変化していくのかを、いろいろな物質と波長の組み合わせで、時間を追って詳しく追跡しました。つまり新しい物質に独自の視点から光を当てる研究こそ、新しい技術と未来につながるという信念がありました。実際、これまでの常識を覆し、光のエネルギーの一部を室温空气中で半年以上にわたって蓄えることができる物質も発見しました。いわば電子（電気）でいうと電池に当たるものの発見です。今後、地球温暖化とエネルギー不足を同時に解決するのは既存技術の延長では不可能ともいわれる中、産業界からも大いに期待されている研究成果です。

これらの研究成果は、これまでに海外の著名な学術雑誌に注目論文、編集長推薦論文、招待論文などとして掲載されているほか、本学の研究成果ストックサイトにも掲載されています。



紫外線を浴びると分子中央の金原子（橙色の球）が斜め上下に飛び出す（白い球）。この際、分子の変形のエネルギーとして、光から受け取ったエネルギーの一部を蓄えていると考えられている。

令和5年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／職名／氏名	医学系研究科／教授／金川 基

新しい翻訳後修飾体（リビトールリン酸）の発見と筋ジストロフィー治療法の開発

代表的な希少難治性疾患である筋ジストロフィーは進行性の筋力低下を認め、筋壊死・再生を主病変とする遺伝性筋疾患の総称であり、多くの原因遺伝子が知られている。2001年に、ジストログリカンという膜タンパク質の糖鎖修飾異常によって発症する一群の筋ジストロフィーの存在が明らかとなり、ジストログリカン異常症という新たな疾患概念が生まれた。しかし、発症に直結する糖鎖の構造、糖鎖修飾に関わる酵素、ジストログリカン異常症の原因遺伝子機能などは不明であり、病態の理解や治療法の開発に大きな障壁となっていた。

学長賞受賞者は、ジストログリカン糖鎖の中から、脊椎動物においてこれまで存在が知られていなかったリビトールリン酸という新しい翻訳後修飾体を発見した。この発見を契機に、福山型筋ジストロフィー、肢帯型筋ジストロフィー2I、ワーカー・ワーブルグ症候群の原因遺伝子として知られていた FKTN、FKRP、ISPD が、リビトールリン酸修飾に関わる酵素をコードしていることを同定した (Cell Reports 2016)。更に、これらの遺伝子欠損マウスを作出し、リビトールリン酸欠損から発症に至るメカニズムを明らかにした (Nature Communications 2019)。また、リビトールリン酸不全マウスを疾患モデルとして用いて、遺伝子治療やリビトールリン酸前駆体補充療法が有効であることを提唱している (Nature Communications 2022、2022年4月14日プレスリリース)。受賞者の基礎研究成果をもとに、現在、リビトールリン酸代謝経路を標的とした、ジストログリカン異常症に対する臨床試験が開始されている。

一連の研究成果は、難病である筋ジストロフィーの病因・病態解明に大きく貢献し、新規の治療法の開発につながった点などの業績が高く評価され、第39回井上學術賞を受賞した (プレスリリース 2023年1月12日)。井上學術賞は、公益財団法人井上科学振興財団により、自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた研究者に対して授与される歴史と名誉ある賞で、本学長賞受賞者は、愛媛県内における初の井上學術賞受賞者となった。以上のように学長賞受賞者は研究論文発表やアウトリーチ活動等を通じ、目に見える形で本学のプレゼンスを県内、全国に示した。

関連業績

1. CDP-ribitol prodrug treatment ameliorates ISPD-deficient muscular dystrophy mouse model. Nat Commun 2022, 13:1847
2. Elimination of Fukutin reveals cellular and molecular pathomechanisms in muscular dystrophy-associated heart failure. Nat Commun 2019, 10:5754
3. Identification of a post-translational modification with ribitol-phosphate and its defect in muscular dystrophy. Cell Rep 2016, 14:2209-2223

令和5年度 学長賞

表彰区分	スポーツ・芸術活動、地域連携活動
所属／職名／氏名	教育学部／教授／田中 雅人

地域におけるスポーツの健全な普及および発展に貢献し、地域のスポーツの振興に顕著な成果を上げたスポーツ関係者に対して、文部科学大臣が授与する「生涯スポーツ功労賞」など、以下の表彰を受けた。

- 2020年 生涯スポーツ功労賞（文部科学省）
- 2021年 功労表彰（日本サッカー協会）
- 2022年 大亀スポーツ賞（愛媛県スポーツ協会）

【関連する主な活動】

- ・日本スポーツ協会
  - 2000年～2014年 日本スポーツ少年団シニアリーダースクール 講師
  - 2003年 日独スポーツ少年団同時交流 日本派遣団 総務
  - 2011年～2014年 日本スポーツ少年団リーダー育成ワーキンググループ 班員・班長
  - 2013年～現在 スポーツリーダー養成講習会、スタートコーチ養成講習会 講師
  - 2015年 日独スポーツ少年団指導者交流 日本派遣団 総務
  - 2015年～現在 日本スポーツ少年団活動開発部会 部会員
  - 2021年 日独スポーツ少年団ユースキャンプ 日本団 副団長
- ・日本サッカー協会
  - 2006年～2017年 全日本大学女子サッカー連盟 理事
  - 2018年～2020年 全日本大学女子サッカー連盟 評議員
- ・愛媛県スポーツ協会
  - 2012年～現在 愛媛県ジュニアリーダースクール 講師
  - 2013年～現在 愛媛県スポーツ少年団 副本部長
- ・その他
  - 2014年～現在 えひめ愛顔のジュニアアスリート発掘事業部会
  - 2014年～現在 愛媛FC・マンダリンパイレーツ健全経営委員会
  - 2021年～現在 愛媛県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会
  - 2022年～現在 学校部活動改革に係る県推進計画策定委員会

日本スポーツ協会では、リーダーおよび指導者養成を中心に活動を行っている。愛媛県内では、小・中学生を対象としたジュニアアスリート発掘事業の専門委員会委員長や講習会講師、プロスポーツ経営や総合型スポーツクラブの運営に関する協議会の委員を務めている。また、学校部活動の改革検討委員会委員長や市町の地域移行検討会議のアドバイザーなどを務め、生涯スポーツにつながる持続可能なスポーツ環境の構築について助言を行っている。



日独指導者交流（2015）



令和5年度 学長賞

表彰区分	地域連携活動
所属／職名／氏名	農学研究科附属ハダカムギ開発研究センター 「地域連携活動」担当グループ 荒木 卓哉 センター長 他4名

農学研究科附属ハダカムギ開発研究センターは、平成29年4月より農学研究科研究グループ「ハダカムギ資源開発研究グループ」として活動を開始し、農学部が松山市東方町の圃場の寄附を受け入れたことを契機として、この寄附圃場を研究拠点として令和3年8月に開設されました。本センターは、裸麦遺伝資源コレクションを構築し、それを活用した機能性ならびに生産性に関わる優良形質の選抜と品種開発を行うとともに、実需者ニーズを反映した有効活用法を開発することで、裸麦の生産振興と需要拡大に貢献することを目的としています。また、麦類に特化したセンターは国内で初めて設置されたことから、地域社会はもとより国内の研究拠点からも大きな注目と期待を集めています。

研究拠点の東方町周辺では国内の多くの地域と同様に、第1次産業の担い手不足が課題となっています。センター教員ならびに関係する学生たちは、毎年5月に実施している現地の水路清掃に参加し、地域農業基盤の維持に貢献するとともに、地域農家との交流を図ってきました。また、裸麦に関するセミナーならびにフォーラムを4回開催しました。麦類に関わる研究者、中国四国農政局、市町村および企業等の関係者に加え、一般の方や高校生等幅広い方に参加いただきました。裸麦の魅力についてはメディアを介しても展開しており、裸麦を広く認知いただくための情報発信拠点としての機能を果たしています。裸麦の幅広い用途と加工を目指して、産官学の連携による商品開発にも取り組み、裸麦100%の生地にしたパウンドケーキ

「Saita!」や裸麦に酢酸菌を作用させた二次発酵法を開発し、食品機能性を付与した麦味噌とひしをを開発しました。

地域のステークホルダーと連携した上記の取り組みは、裸麦の生産振興ならびに消費拡大を目指して今後も継続して実施する予定です。



「裸麦が創る食と農の未来フォーラム2022」関係者



共同研究により開発した商品

令和5年度 学長賞

表彰区分	医療活動
所属／職名／氏名	救急部、感染制御部、看護部、医事課、医療サービス課

医学部附属病院では、新型コロナウイルス感染症の重症患者用を受け入れるため、ICU2病床をコロナ専用病床として確保し、県内の医療機関等と連携しながら、多くの重症患者の治療に貢献してきた。

新型コロナ患者の治療にあたり、特に貢献のあった部署の業績は以下のとおりである。

**【救急部】**

- ・新型コロナウイルス重症患者の治療に貢献した。
- ・県内における重症病床の拡大、後方支援病院の確保等に尽力した。

**【感染制御部】**

- ・院内の感染防止対策の方針の決定・実施等及び現場での感染防止の実施に貢献した。
- ・県内の軽症者宿泊療養施設の運営・管理に貢献した。
- ・医療従事者及び職域接種等におけるワクチン優先接種に貢献した。

**【看護部】**

- ・新型コロナウイルス重症患者の治療に貢献した。
- ・新型コロナウイルス専用病床（ICU2）における看護体制の維持に貢献した。

**【医事課・医療サービス課】**

- ・病院における新型コロナウイルス感染対策の実施及び患者対応に貢献した。
- ・ワクチンの受取、搬送、管理、接種業務に貢献した。

令和5年度 学長賞

表彰区分	医療活動
所属／職名／氏名	附属高等学校／養護教諭／寶田 千年

令和2年1月に発生した新型コロナウイルス感染症は、世界中で猛威を振るい、全国的に経験したことがない感染の拡大となり、生徒たちの生活や教育が激変しました。

学びの保障と感染症対策に苦慮するなか、教職員や保護者、管理職、学校医等との連携や協力を得て、感染症予防や対応に努めてきました。

日常の感染症対策として、登校前の健康観察の実施、マスク・手洗い・換気・身体的距離の確保・黙食の呼びかけ、校内の消毒液設置、環境の工夫（昼食のとり方、ホームルーム教室にCO2濃度測定器・熱中症指数モニター・サーキュレーター・加湿器・除菌消臭器の設置、教室の環境日常点検）を行いました。

また、日常の感染防止対策の指導監督に加え、健康診断や運動会等の学校行事においても適切に感染防止策を実施して、学びを止めない学校づくりに努めました。

感染拡大防止対策として、毎朝、出欠と欠席理由の確認を行いました。特に、陽性者や濃厚接触者が発生するなど突発的・臨時的な対応においては、エクセル等を利用して視覚的に状況把握がしやすい資料づくりを工夫するなどして、詳細な把握とそれを踏まえた迅速かつ適確な対応を提案しました（下表）。

4月 新型コロナウイルス感染症状況一覧

P:PCR 抗:抗原検査    ★高発熱 △咽頭痛 ♡体調不良 ☆頭痛    ○:遠隔授業

R4. 4. 19 11時30分

学年	性別	検査結果	濃厚接触	氏名	4/6	7/8	9/10	11/12	13/14	15/16	17/18	19/20	21/22	23/24	25/26	27/28	29/30	備考	
水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
教職員	1	○	父	濃厚	○	○													
1	○	女	母	?				1	2	3	4	5							
1	□	女	母	?					1	2									
1	▲	女		濃厚	▲	▲													
1	■	女		濃厚	■	■													
2	○	女	抗	陰	○	○	△	抗	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
2	●	女	P	陽	●	●													
2	■	女	P	陽	■	■													
2	□	女		濃厚	□	□													
2	▲	女		濃厚	▲	▲													
2	△	女		濃厚	△	△													
3	○	女	母	濃厚	○	○			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
3	□	女	P	陽	□	□			○	部次	部参加	部参加	1	抗	2	3	4	5	6
3	■	女	抗	濃厚	■	■			○	部次	部参加	部参加	1	抗	2	3	4	5	6
3	▲	女	抗	濃厚	▲	▲													
3	△	女	抗	濃厚	△	△													
3	○	女	抗	濃厚	○	○			★	抗	1	2	3	4	5	6	7	8	9
3	●	女	P	陽	●	●													
3	□	男	母	濃厚	□	□													
3	▲	女	抗	濃厚	▲	▲													
3	△	女		濃厚	△	△													
3	○	女		濃厚	○	○													
3	□	女		濃厚	□	□													

【出席停止期間】濃厚接触:発症翌日から7日 陽性:10日    3-1学年閉鎖 4/18,19    3年生学年閉鎖 4/19(7)~21    18日の週からオンライン対応

生徒保健委員の活動においては、保健だよりや掲示物作成による啓発活動や教室の環境日常点検を行い、感染症予防意識の高揚や主体的に感染症予防ができるように努めました（写真）。



また、物的な対応だけでなく、コロナ禍で普段以上に精神的な不安を抱える生徒の心のケアや保護者の相談に関係職員や関係機関と連携・協働して対応しました。

令和2年度より、過去経験したことがない感染症に「チーム附属高校」の一員として、最前線で取り組んできました。新型コロナウイルス感染症は令和5年5月で第5類になりましたが、基本的な感染症対策は続きます。今後も生徒の学びや健やかな心身の成長が確保されるよう、引き続き専門的知見を生かし、生徒の健康管理等について中心的な役割を果たしていきます。